「みやこの舞楽」展によせて

天王寺楽人ゆかりの舞楽面

特別展の名称である「みやこの舞楽」とは、宮中及び南都で行われていた舞楽を意識しています。つまり雅楽寮や大内楽所といった宮中に設置された雅楽演奏組織、さらに南都・天王寺など、のちに三方楽所として発展する雅楽演奏集団が関わった宮中周辺で行われていた正統の舞楽を指します。近世には、こうした楽所の楽人が紅葉山や日光に出仕し、舞楽の発展に大きな役割を果たしました。現在全国に広がる舞楽は、いずれもこの中央における舞楽が伝播したものであり、舞楽面も同様に各地に広がったものです。

展覧会では、南都を中心に継承された舞楽面を、時代の流れに沿って紹介していきますが、これに加えて舞楽を代々相伝してきた楽家と舞楽面との関わりについても紹介します。三方楽所を構成した楽人は、それぞれの「家」において特定の楽器や舞を家芸として守り、父子相伝の形で代々継承してきました。こうした楽家において由緒ある舞楽面を所持することは、その舞の正統性を示すとともに、公の楽儀で演奏を行う資格を裏付ける重要な意味を持っていました。本稿では、そうした一例として天王寺楽人ゆかりの舞楽面をみていきたいと思います。

現在東京国立博物館の所蔵となっている天野社伝来舞楽面の中に、天王寺楽人寄進の面が含まれています。天野社（丹生都比売神社）は、高野山の鎮守社として信仰を集め、承元年間（1207～1211）に始められた一切経会での舞楽を起源として、以後近世に至るまで舞楽が行われました。それに用いられた舞楽面や舞楽装束、楽器類など中世に遡る舞楽関連品が数多く遺っています。この天野社に伝来する面の中に、「大秦公合」なる人物により天野社に施入されたことを記す舞楽面（皇仁庭3面〔図1〕、地久3面〔図2〕、退宿徳2面）が伝わります。大秦公合は、醍醐寺本『真言声明血脈』の「顕教声明血脈」に「天王寺伶人」としてその名が見え、天王寺楽所の右方楽頭を勤める楽人であることがわかっています。

平安時代から中世における宮中の奏楽は、大内・南都の楽人が担っていた一方で、平安時代末期以降、天王寺楽人は淡路島・賀集八幡宮の一切経会（建久2年〔1191〕）、勝尾寺の般若会（宝治2年〔1248〕）、播州清水寺の堂供養（応安4年〔1371〕）など、各地の寺社における奏楽を担っていたことが知られています。天野社舞楽における舞楽面の施入も、こうした活動の一端を示すものと考えられます。

大秦公合寄進面は全体に小ぶりで、目や口を小さく中央に寄せた素朴な表情を示し、他の天野社伝来面とは作風に大きな相違がみられます。天野社伝来面の中には東大寺系統の形式を踏襲する舞楽面も含まれており、南都との関わりが想定されます。これは、施入した楽人と舞楽面の系統とが密接に関連していることを示唆しています。

次に、天王寺楽家のひとつである東儀家に伝来した舞楽面として、陵王面（図3）と納蘇利面（図4）があります。これらは貞享2年（1685）から元禄5年（1692）の間に東儀家より四天王寺に寄進されたもので、鎌倉時代の製作になるものです。寄進されたのちは、実際の舞楽で用いられずに什物として宝蔵に収められていたとみられ、寺宝開帳の際には宝物として公開されていたことが史料から確認できます。

陵王面は、逆立った翼や立体的な雲を伴う龍の装飾的な表現が優れ、厳めしい中にも優美さを具えた面となっています。技巧的で繊細な作風が顕著で、細やかな毛筋の堅実な彫刻が特徴です。納蘇利面も陵王面と同じく、恐ろしい形相ながらもどこか気品を感じさせます。四天王寺のみならず鎌倉時代の舞楽面を代表する優品として知られています。

本展覧会で初公開される個人蔵の胡徳楽瓶子取面（図5）も天王寺楽人ゆかりの面であることがわかっています。本面については、彫刻家・森川杜園（1820～1894）の描いたスケッチ（「玉虫厨子模写図等貼交屏風」奈良県立美術館蔵）が遺されており、そこに「天王寺楽人/岡氏ノ手ヨリ内見ス」の書き込みがあって、もとは天王寺楽人の岡家の所蔵であったことが知られます。なお実業家・久原房之助（1869～1965）所蔵品の売り立て目録（『某家所蔵品入札目録』）に「天平時代木彫朱楽面」として掲載されており、昭和16年（1941）までは久原の所蔵であったことがわかっています。四天王寺伝来の胡徳楽瓶子取面（図6）の形状を踏襲するとともに、天王寺楽人岡家の所蔵であったという点で貴重な作例といえます。

本展覧会では、宮中や南都で行われてきた正統の舞楽に用いられた舞楽面の系譜をたどり、その本流の様相を明らかにします。一方で、天王寺楽人ゆかりの舞楽面はいずれも、この本流とは異なる系統を示しています。これは、楽所において継承される形式と、東儀家など各楽家に伝わった面の形式とが必ずしも連動していなかったことを示しています。このように、楽家に伝来した舞楽面を見ていくと、公儀の舞楽とは別に、そうした枠組みにとらわれない自由な形で、家に伝わる面を受け継いできたことがうかがえます。　（一本崇之）

※図1・2はColBase（https://colbase.nich.go.jp/）より転載、図3・4・6は四天王寺提供、図5は筆者撮影。


図1　舞楽面 皇仁庭（東京国立博物館蔵）


図2　舞楽面 地久（同）

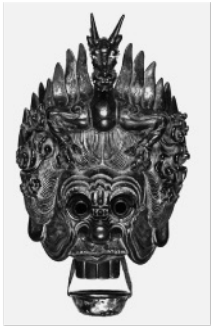

図3　舞楽面 陵王（四天王寺蔵）


図4　舞楽面 納蘇利（同）


図5　舞楽面 胡徳楽 瓶子取（個人蔵）


図6　舞楽面 胡徳楽 瓶子取（四天王寺蔵）

季刊 美のたより No.232
令和７年 ９月 26日
発行 大 和 文 華 館

Copyright © The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.